

凱達格蘭（ケタガラン）大道と台北賓館

片倉 佳史

台湾総督府庁舎（現中華民国總統府）の前をまっすぐに伸びる全長400メートルの凱達格蘭大道。そして、これに面した壮麗な西洋建築。かつては台湾総督官邸として建てられ、現在は台北賓館として迎賓館の機能をもつ歴史建築である。今回はこの2つを取り上げてみたい。

閉ざされていた未知の空間

前回取り上げた旧台湾総督府（現總統府）の正面には、凱達格蘭（ケタガラン）大道と呼ばれる道路が伸びている。起点は東門で、終点が總統府となっている。その長さはわずか400メートルあまりだが、片側5車線と路幅は広く、デモや集会、国家イベントがこの場所で行なわれることは少ない。

この道路に面して一棟の歴史建物が残されている。どっしりとした雰囲気、重厚感が漂っている。住所は台北市中正区凱達格蘭大道1号（1番地）。前庭には亜熱帯性の樹木が繁茂し、建物の全容は見えないものの、建物の放つ壮麗さがとても印象に残る。

この建物がかつての台湾総督官邸である。言うまでもなく、台湾総督の公邸で、皇室関係者や賓客が訪台した際の接待所でもあった。3階建ての大きな建物で、煉瓦と石材を混用して造られたと言われている。現在の姿になったのは1913（大正2）年のことだった。

戦後は中華民国に接收され、外交部（外務省）の管轄下に入り、国賓を接待する迎賓館として使用されるようになった。国賓を迎えるという性格上、長らく一般市民はこの建物に近寄ることが禁止されていた。日本統治時代や戦後の戒厳令の時代（1949～1987年）はもちろん、民主化が進められた後でも、撮影や取材の許可を得ることは容易



市内随一とも言える路幅を誇る凱達格蘭大道。国家行事やイベントの際にはここが会場となることも多い。總統府を遠望。



台湾総督官邸として建てられた台北賓館。迎賓館としての機能を持ち、国賓の接待などに用いられている。

ではなかった。ある意味では、總統府以上に閉ざされた空間だったと言える。

初代の総督官邸と改築秘話

この場所に台湾総督官邸が造営されたのは1901（明治34）年のことである。時の台湾総督・児玉源太郎によって1899（明治32）年に起工。

翌々年の9月26日に落成している。舶来物がもてはやされていた時代でもあり、使用されたレンガはすべてイギリスから持ち込まれたものだったという。総工費は21万7千円にものぼり、あまりにも巨額なために政府中央から痛烈な批判を受けたとも言われている。

しかし、この建物はわずか10年あまりで大がかりな改築工事を受けることになる。初代の官邸を設計したのは台湾総督府技師の福田東吾と野村一郎の二人だったが、造営に当たり、思わぬ困難に出くわすこととなる。それは白アリの存在だった。もちろん、日本本土にも白アリはいる。しかし、南国特有種による被害は想像以上に大きかった。用材にはヒノキをはじめ、高級木材がふんだんに用いられていたが、台湾の白アリによって蝕まれてしまった。

これを受け、1911（明治44）年に大規模な改修工事が施されることとなった。増改意匠は森山松之助と八板志賀助に委ねられた。この時は総工費15万円が計上され、翌々年の3月31日に工事が終了している。

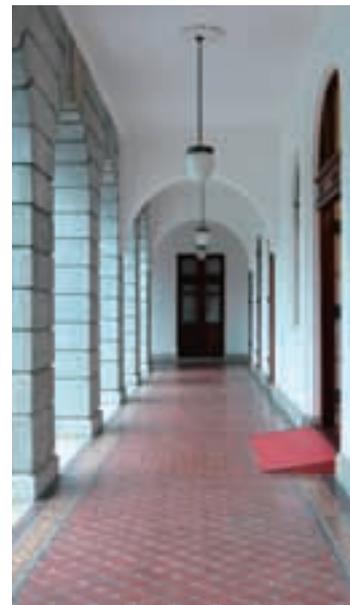
この改築時には正面が丸みを帯びた印象のマンサード屋根になったほか、2階と3階部分に計296坪の増築が施されている。ベランダが整備されたのもこの時からで、これによって改築前の様子とは大きく雰囲気が変わった。これが東南アジア各地で見られた欧米式コロニアル建築の影響を受けたものであることは言うまでもない。

戦前の文献で知る台湾総督官邸

日本統治時代、台北は台湾の島都として、数多くの官庁建築が建てられた。多くは西洋建築のスタイルを踏襲しているが、その中でもこの建物は台湾総督府や専売局、台湾総督府博物館、台北州庁舎などと並び、台湾を代表する建造物に挙げられていた。一般市民には閉ざされた空間ではあったが、竣工時から、その威容は大きく話題になっ



白アリの害に遭い、大がかりな修繕を受けることになった総督官邸。その後も長らく、白アリ対策は台湾建築界の重要なテーマとなっていた。



建物の四方にベランダが設けられているのもこの建物の特色。現在の姿になったのは1913年のこと。この工事を担当したのは森山松之助であった。

ていたという。

戦前、台湾で発行されていた『台湾建築会誌』という学会誌がある。それによると、この建物は赤煉瓦と石材を混用して造られていた。外観はフランス風バロック様式と呼ばれるもので、曲線を多用するところに特色がある。竣工時に出ていた

新聞記事などを見ると、「壮麗さをほのかに醸し出したような造り」という表現で讃えられている。

現在は高い壁が設けられているが、凱達格蘭大道の側からこの建物を眺めると、建物全体を見ることができる。左右対称のシンメトリーがもてはやされた時代、珍しく非対称の建物である。正面右側には昭和天皇が皇太子時代に行なった台湾行啓の際、民衆に手を振ったというバルコニーが見える。

外壁に関しては、堅牢さを追った結果か、全体が暗めの色で覆われている。そのため、明るさのようなものは感じられず、どちらかというと、周囲を威圧するような風格を漂わせている。現在は大きく繁茂した植物に覆われているが、戦前は相当な威厳をまとっていたに違いない。



植樹された樹木は現在ほど繁茂していない。後方に台湾総督府が見える。戦前に発行された絵はがきより。



正面から眺めた現在の台北賓館。用材には台北城の城壁を撤去した際に得られた石塊も使用されたという。

皇太子行啓と特別客車ホトク1型

1923（大正12）年4月、皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）が摂政の宮として、台湾を12日間視察した。この台湾行啓は4月12日に横須賀を軍艦「金剛」で出発し、16日に基隆港に到着している。ここから台北に向かい、台湾総督官邸を宿泊地として、各地を巡っている。

船は早朝に基隆港に入港していたが、皇太子が台湾の地を踏んだのは4月16日午後1時25分であったという。そのまま基隆駅に向かった皇太子は特別列車で台北に向かっている。

皇太子を乗せた列車は7両編成で、5両目に皇太子専用の特別車両が連結されていた。この日、基隆では約3万人の民衆が出迎えに訪れたとされる。列車は午後1時30分に発車しているので、その間わずか5分である。動員された数がいかに多かったか、驚きに値する。

なお、この時の特別車両は非公開ながらも台湾で残されている。この車両は台湾総督府交通局鉄道部が設計したもので、「ホトク1」と呼ばれていた。台湾行啓に合わせて特別に製造されたものだったが、戦後はSA4102号車と改番された。

この車両は当時の車輛製作技術と工芸美術の粋を結集させたものだった。細部にわたって日本本土から派遣された技師が手がけ、用材には紅ヒノキとアメリカ産の松が用いられた。鋼鉄類についてもすべて欧米から輸入されたものが使用されるという凝ったものだった。

車体は紫色に塗られ、菊の紋章がはめ込まれていた。随所に蘭や蝶をモチーフとした彫刻が配され、華やかな雰囲気となっていた。また、当時としては非常に珍しい扇風機も設置されていたという。

この客車は自重24.6トン、車体長は16.4メートルの木造客車である。竣工は1913（大正2）年3月、台北鉄道工場で製造された。この車両で注

目したいのは、車内に掲げられた人物画である。これは明治の著名画家・川端玉章の晩年の作品とされている。

戦後、鉄道施設が中華民国に接收されると、この車両は蒋介石の専用車両となった。トイレなど、一部は改造されてしまったが、ほぼ往時の姿を保っている。そして、1967年に新しい専用車が設計されたことで、こちらは現役を退くこととなった。

残念ながら、この車両を目にできる機会はほとんど皆無である。台湾にはこの車両以外にも台湾総督が視察時に使用していたコトク1という貴賓車が残っている。しかし特別なイベントなどがないかぎり、公開されることはない。現在、台湾鐵路管理局は台北郊外の七堵に空調完備の専用車庫を設けており、2両の貴賓車はこの中に身を横たえている。

戦前に製造された貴賓車（御料車を含む）で原型をとどめるのは、日本国内でも10両に満たない。そして、明治・大正期の鉄道車両がほとんど残っていないという現実をふまえると、この車両の希少価値はより際立ってくる。

台北に到着した皇太子一行は馬車で台湾総督官邸に向かったという。そして、民衆の歓待を受け、その後、台湾神社に明治天皇の遺品を寄進している。

4月17日と18日は台北市内の各地を視察している。この両日も台湾総督官邸が宿泊所となった。19日は早朝に台北を離れ、新竹と台中へ赴いている。そして、20日には台南へと向かった。21日には高雄、22日は屏東の台湾製糖株式会社の工場を視察。23日に高雄港から澎湖の馬公港へ向かっている。この日は船中泊となっており、24日に基隆港に入っている。

再び台北に戻ってからは台湾総督官邸に3泊している。つまり、台湾行啓は11泊12日の行程だったが、そのうちの6泊をこの総督官邸で過ご



皇太子行啓に合わせて製造されたホトク1と総督専用車コトク1。現在は七堵に設けられた専用車庫に置かれている。公開される機会はほとんどない。



車両側面の丸窓には二枚の三角ガラスがはめ込まれている。これは台湾の「台」の字を模したデザインである。

しているのである。こういった状況からも、この建物の位置づけがうかがい知れる。

そして、最終日となる4月27日。皇太子一行は基隆港から帰途についている。余談ながら、東京までの船上で皇太子は22回目の誕生日を迎えている。

瀟洒を極めた室内空間

台北賓館の館内に足を踏み込むと、贅沢を極めた空間に言葉を奪われる。李氏朝鮮最後の王位継承者・李垠（りぎん）が巡視記録『台湾を視る』という書物を残しており、そこに興味深い記述がある。李垠は1935（昭和10）年に台湾を視察し、この建物に宿泊している。この時、朝鮮総督官邸との比較がなされているのだ。

まず、敷地面積について大きな差はなく、建坪

に関しても同程度だったという。しかし、内部の壮麗さは、比較にならないほど台湾が上と記されている。この記録を付けたのは李垠自身ではなく、篠田治策という人物だが、台湾総督官邸の部屋はとにかく広く、主賓のみならず、随行する人員のために用意された部屋までもが立派過ぎて、かえって使い勝手が悪いという印象を書き残している。

現在は正面玄関を入ると、深紅の絨毯が敷かれ、巨大なシャンデリアが目に入ってくる。日本統治時代の文献には館内は木目調の落ち着いた雰囲気でもとめられていたとされる。これは改装を受けたことで様子が変わっているものの、格調高い雰囲気は今もしっかり保たれている。

一階は公務と接待の空間とされていた。玄関からまっすぐに進むと庭園に出られるようになっているが、西翼に大食堂、東翼に応接室・会議室があった。中央通路から大食堂に向かう手前には控え室を兼ねた第二客室、会議室の手前には第一客室が設けられていた。これらの部屋には暖炉が設けられており、現在も残されている。そこにはイギリスから運び込まれた美しいタイルが貼られており、優雅な雰囲気を醸し出している。このほか、東翼には応接室、書記室、そして秘書官・副官室があった。

西翼の大食堂はレセプションルームとして使用され、社交の場となっていた。皇太子台湾行啓の



大広間の様子。往年の姿をほぼ留めているという。出窓の部分はステージのようにになっている。



中央の廊下から玄関ホールを見る。車寄せは改築時に設けられ、ここだけで11坪の広さがあるという。



各部屋にはイギリス製の暖炉が据え付けられていた。17箇所には設けられており、それぞれのデザインが異なっていた。

際にも、ここで歓送迎会が行なわれたという。この大食堂からは直接庭園に出ることができ、これは現在の参観順路になっている。ここで供される料理は常に西洋料理だったというのも興味深い。

二階は居住空間とされていた。ここには寝室や客室のほか、朝食をとるための食堂や婦人専用室があった。そして、屏風や掛け軸、水墨画といった文物を展示するための広間もあったという。

亜熱帯性の植物が植えられた庭園

建物の奥には庭園が設けられていた。日本統治時代に発行された絵葉書などを見ると、この庭園と池を構図に取り込んだものが数多く発行されている。

池はやや複雑な形をしており、橋が三箇所架け

られていた。そして、随所に築山が施されており、日本的な景観が演出されていた。しかし、ほとりには西洋風のデザインでまとめられた涼亭があり、異国情緒も感じられる雰囲気だった。

また、この庭園に植えられた樹木は種類が多かった。しかも、日本本土では見るのが難しい亜熱帯性の植物ばかりが選ばれていた。特にガジュマルが存在感を示している。この樹は台湾のシンボルという扱いを受けていた植物で、今も各地で見られる。日本統治時代の写真や絵はがきでも頻繁に登場している。

日本では見られない植物を選んで植えていたのには理由がある。これは治安と衛生状態が不安定だった時代、園内を巡るだけで台湾らしい風情を



建物後方にあった広大な庭園。植樹された樹木は40種におよんでいたという。



庭側からの様子。1階部は石組みのどっしりとした造りとなっており、安定感が示されている。



正面右手にあるベランダから總統府を眺めた様子。昭和天皇が台湾を訪れた際、この場所から民衆に手を振ったと伝えられる。(許可を得て撮影)

楽しめるようにという配慮だったのだ。特に疫病の蔓延が深刻だった時代、日本本土からやってきた要人の健康面を考慮し、極力台北に留めたいという意図もあったようである。もちろん、これは昭和期に入り、治安や衛生状態が安定してくると状況は変わったが、日本統治時代前半に造営された公園は、亜熱帯性の植物園のような雰囲気のある場所が多い。

一般公開が実現した迎賓館

戦後を迎えると、中華民国国民党政府が台湾の統治者となった。そして、この建物も接収を受けることとなる。当初は中華民国台湾省主席官邸となっていたが、1950年に總統府の管轄下に入り、名称が台北賓館に変わった。さらに、1963年には外交部（外務省）に移管され、迎賓館として使用されるようになった。

1998年7月には古蹟の指定も受け、建物の保存が決定した。しかし、建物として古いだけでなく、修復工事が行なわれたのが1977年のみで、それも内部の改修にとどまっていた。そのため、見た目以上に建物の傷みは大きく、2001年9月からはほとんど使用されなくなっていた。

その後、一般公開を前提とした補強工事が行な



郷土史探訪ブームもあり、歴史建築への市民の関心は高い。時には行列を覚悟しなければならないほどの人気である。

われることになった。それは4年にもおよぶ大工事となった。そして、2006年6月4日、待望の一般公開が実現した。当日は午前9時から午後4時までが参観時間とされたが、4000名もの人々が見学に訪れたという。敷地を取り囲むように続く長蛇の列は新聞やテレビでも大きく報道された。現在はやや落ち着きを見せているものの、歴史建築や古蹟に対しての人々の関心は高く、多くの参観者が訪れている。

平地原住民の名前が付いた幹線道路

本稿の冒頭で述べた凱達格蘭大道についても述べておきたい。この「凱達格蘭」とは台北盆地にかつて暮らしていたケタガラン族を意味する中国語表記である。

この道路は短いこともあり、沿線には公園のほか、わずか3つの建物しかない。起点となる東門から見て、まずは右手に台北賓館がある（住所は台北市凱達格蘭大道1号）。その向かいには外交部（同凱達格蘭大道2号）。台北市228和平紀念公園内にある228紀念館（同凱達格蘭大道3号）。そして、終点に位置する総統府である。

総統府前には凱達格蘭大道を挟んで大きな空き地がある。北側はかつて民政長官官邸があった場所である。これは戦時中の空爆によって焼失し、

復元されることはなかった。また、南側の台北市228紀念公園の向かいには、介寿公園という緑地があり、その中には国民政府の主席を務めた林森（りん・しん）の銅像が建てられている。

かつて、この道路は介壽路と呼ばれていた。「介壽」とは、蒋介石の長寿を祈願するという意味の言葉である。日本統治時代はこの道路に特別な呼称はなかったが、1946年10月に蒋介石を記念して介壽路となった。戒嚴令下、市民はここを歩く際、頭を下げ進むことを強いられ、自転車やオートバイの通行も禁止されていた。当然ながら、写真撮影などはかたく禁じられていた。

しかし、1996年3月21日、時の台北市長・陳水扁によって「凱達格蘭大道」と改められた。当時は台湾の原住民族文化に敬意を払うということが改名の理由とされていたが、新しい民主国家を築いていく上で、「特定の権力者の名が付されるのは好ましくない」という理由もあった。

しかし、ケタガラン族という部族名は、台湾の人々であっても、若干耳に慣れないものがあつたというのも事実である。もともと、台湾北部から南部までに西側一帯には平埔族と呼ばれる人々が暮らしていた。これは平地に暮らす原住民族の総称で、いくつかの部族から成り立っていた。北部ではケタガラン族、南部ではシラヤ族が勢力を誇っていた。

平埔族は漢人住民の移入によって遷移を余儀なくされたばかりでなく、混血を繰り返すことで漢人文化に併呑されていった。日本統治時代が始まった頃にはすでに文化的独自性を失っていたというのが定説だ。

そして、ケタガラン族の居住地が台北や基隆といった北部一帯に限られるため、中南部ではこの部族名を耳にしたことがないという人も数多くいる（南部ではシラヤ族やマカタオ族が多かった）。

しかしながら、こういった文化事情は台湾が多くの族群によって構成された複合社会であること



凱達格蘭大道の様子。1963年に拡張が施され、現在の様子となった。イベントの会場になることも多い。

を示しているだけでなく、いわゆる中国文化とは別個の土着文化が台湾には存在したことを物語っている。そのため、台湾の文化的独自性を重視する動きの中では、重要な意味合いを含んでいる。凱達格蘭大道の名はそういった事情を象徴的に示しているのである。

台湾住民の多数派を占めるホーロー人

台湾には「族群（エスニック・グループ）」と呼ばれる特殊な集団分けが存在する。これは文化や習慣が共通した集団を意味しており、民族というよりも「アイデンティティをともにする集団」という表現が適切である。表面的な付き合いをしている中ではあまり感じられないが、台湾の人々は自らがどの族群に属しているかを意識しており、社会的にも族群意識は根深く作用している。

周知のように、台湾の住民を大きく分けると、中国大陸から渡ってきた漢人移民の子孫と、それ以前からこの島に住んでいた先住民（「原住民」もしくは「原住民族」と表現される）がいる。

まず、台湾原住民は漢人住民が中国大陸から渡ってくる前から台湾島にいた人々である。その起源は東南アジア・太平洋方面にあると推測され、台湾島西部の平地に住んでいた「平埔族」と、台湾の東部と山地に住む「高山族（山人）」とに二

分されていた。しかし、先にも述べたように、平埔族は清国統治時代から漢人文化に同化し、アイデンティティを失っていった。そのため、現代台湾では平埔族を漢人住民に組み込み、原住民と言えば平埔族以外の各部族を示すことが多い（平地に住むアミ族やプユマ族、クヴァラン族などもここに含まれる）。

一方で、台湾住民の大部分を占める漢人系住民は、いずれも中国大陸から渡ってきた移民の子孫である。これは大きく「本省人」と「外省人」に分かれる。日本統治時代以前に台湾へ渡っていた人々を本省人、第二次世界大戦後に渡ってきた人々を外省人ととらえておくと理解しやすい。

本省人とは「漢人住民のうち、台湾を出身地とする土着の人々」という意味である。総人口の8割以上を占め、多数派のホーロー（河洛）人と、時期的にやや遅れて渡ってきた客家人に分かれるが、両者は意識上、明確に区分される。

最初に台湾へ渡ってきたホーロー人は、17世紀頃に移住してきた人々で、多くが福建省を出身地としている。しかし、台湾に渡ってきた後、平埔族との混血が進んだ。現在はそれを踏まえ、ホーロー人と呼ばれることが多い。漢字では「河洛人」とされるが、何種類かの表記が存在する。そのため、アルファベットで「Holo」と記すことも多い。

ここで注目しなければならないのは、移民は家族単位でやってきたわけではなく、荒波の台湾海峡を渡るために、男性が圧倒的に多かったことである。しかも、清国の封鎖政策によって、婦女子の渡台は長らく禁止されていたので、台湾へやってきた者は男性が大半を占めた。

そのために、台湾で漢人たちは混血を繰り返すことになったが、その相手となったのが平埔族の女性たちだった。つまり、台湾へやってきた漢人たちは平埔族と混血していく中で、その文化に接触し、融合していったのである。これによって平埔族のアイデンティティは失われたが、漢人の側

も「台湾」という土地に適応していくかたちで変化を遂げていった。その結果、誕生したのがホーロー人である。つまり、彼らが「漢人系」であることは事実だが、混血により、台湾という地に土着化したことは明らかである。

ケタガラン族とはいかなる人々か

では、ケタガラン族というのはどんな人々だったのだろうか。彼らはマレー・ポリネシア系の南方アジア人種で、血統的には他の台湾原住民族と同系であるとされる。1897（明治30）年に台湾を訪れ、各地を調査した人類学者の伊能嘉矩（いのかのり）は、当時、わずかに確認できたケタガラン族の生活文化に関する記録を残している。これによると、ケタガラン族は狩猟と採集を糧とし、ある程度の農耕も行っていたという。

彼らの伝承を調べていくと、もともとは台湾の住人ではなく、黒潮に乗って南方から渡ってきた人々であるという。彼らが最初に上陸したのは台湾の東北端に位置する三貂角付近だったとされ、彼らの発祥地は「サナサイ」という土地であるという。

このサナサイは台湾東部に暮らすアミ族の伝説にも登場し、現在の緑島を示していると言われている。また、クヴァラン族もこのサナサイが自らの発祥の地であるとしている。さらに、台東市付近に暮らすプユマ（ピユマ）族にも「サナサン」という土地があり、自らの郷里であるという言い伝えが存在している。

文献によれば、ケタガラン族は小さな集落を作って暮らしていたという。しかし、その居住範囲は広く、台北盆地から北部一帯におよんでいた。現在も台湾北部には「鶏籠（ケーラン・現基隆）」や「北投（パッタウ＝ケタガラン後で巫女の意味）」、「艋舺（ヴァンカ・現萬華）など、ケタガラン族の言葉に由来する地名がいくつか見られる。

また、ケタガラン族は母系社会だったが、特に



台湾南部に暮らすシラヤ族の人々。わずかながらも伝統文化を残している。毎年秋から冬の時期に行なわれる夜祭り。場を仕切っているのは女性たちである。

結婚の風習が独特で、娘が年頃になると小屋を与える習慣があったという。そして、気に入った相手に巡り逢うと、男の手を牽いて自分の小屋へ迎え入れたのである。これが求婚となる。

現在、ホーロー語（台湾語）では、結婚相手、もしくは連れ合いのことを「牽手」と表現する。この言葉は平埔族の風習にちなんでいる。平埔族が漢人文化に吸収されていったのは事実だが、同時に、漢人住民も平埔族文化に接して変容したことをこの言葉は示している。

多くの「台湾人」は混血を経ている

従来、台湾で圧倒的多数派となっているホーロー人は自らが「漢人（漢民族）」であることを疑わなかった。しかし、1990年代から、これに異論を唱える声が高まってきた。

これまでも述べたように、台湾に住む漢人系住民の多くが平埔族との混血を経ているのは事実である。2001年には馬偕記念病院の林媽利医師によって、台湾の漢人住民と原住民族、そして、中国の漢人住民の「HLA（ヒト白血球型抗原）」の分析が行われ、台湾の漢人住民（外省人を除く）の遺伝子は台湾原住民に近く、かつ古代越族（華南地方にいた民族で現在は漢人に同化したとされる）の流れを汲んでいることが指摘された。

さらに、医学界からも、骨粗鬆症やビタミンD

欠乏症、高尿酸血症、脳血管疾患に罹りやすいことが台湾の漢人住民と原住民族の共通点として挙げられて話題となった。さらに、人類学の観点からもホーロー人と平埔族の体質には類似点が多いという指摘がある。つまり、多くの漢人系台湾人は外省人を除くと、北方の漢人とはそもそも縁遠く、しかも、平埔族との混血を経て、南方漢人とも異なった一種族を形成したという事実が浮かび上がる。

こういった状況は「台湾＝中国（中華民国）」という国民党政府の主張を根底から覆してしまう。つまり、祖国統一を主張する外省人勢力には不都合な意見であるため、国民党による独裁の時代、こういった意見は徹底的に弾圧されてきた。台湾でこういった議論ができるようになったのは、言

論の自由が認められるようになった1990年代に入ってからである。また、中国（北京政府）にしても、「中国人が移民していったのだから台湾は中国の一部である」という主張を否定されてしまうので、こういった学説に耳を傾ける様子は見られない。

それでも、庶民レベルでこういった知識が普及しつつあるのも事実である。年々高まりを見せる台湾の土着意識をいかに扱うか、これは政策的にも重要なポイントとなっている。総統選挙を終えた今、「台湾人とは何か」という命題については議論が止む気配はない。

今回は総統府周辺の歴史建築をいくつか紹介してみたいと思う。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ30冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾 鉄道の旅』（JTBキャンブックス）、『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『観光コースでない台湾』（高文研）など。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』（玉山社）などの著作がある。2012年2月、交通新聞社より『台湾に残る日本鉄道遺産』を刊行予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>